ブレーズ・パスカル『プロヴァンシアルの手紙』の表現形式（一）
——手紙——

森　川　　甫

はじめに　表現形式　手紙と対話
手紙
Ⅰ．田舎の友への手紙—私的書簡—
Ⅱ．イエズ会の神父がたへの手紙
—公開質問状—

はじめに

『プロヴァンシアルの手紙』[1] は、1656年1月から1657年3月までの1年余りの間に、18通の手紙の形で出版されたパンフレットである。大部分の手紙は、1枚の紙の4つ折判8ページで、「第16の手紙」と「第18の手紙」だけは1枚半の紙の4つ折判12ページで構成されている。表紙はなく、冒頭に、表題と日付が下記のごとく載せられている。

LETTRE
ESCRITE A VN PROVINCIAL
PAR VN DE SES AMIS
SVR LE SVJET DES DISPVTES
presentes de la Sorbonne.
De Paris ce 23. Ianuier 1656

著者の名前も、差出人の名前もなく、匿名であるが、「第3の手紙」の末尾には、

Vostre tres-humble, & tres-
obeïssant serviteur,
E. A. A. B. P. A. F. D. E. P.

という署名がある。

イエズス会のラパン神父によれば、「小さな手紙」[1] まず、サロンで発表され、次いで、発売されると、すぐに売り切れた[2]。

主として、パリで、ポール・ロワイヤル修道院に味方する印刷業者がコピーを作成、地方へ、さらに、「イギリス、オランダ、スイス、ドイツ、また、ローマ教皇にほとんど好意を持たない国」[3] に送られた。この「小さな手紙」にかかわると、逮捕される危険があった。事実、逮捕され投獄された印刷業者もあった。もっとも危険なのは、筆者のパスカルであったが、官憲は作者を特定することができなかった。パスカルが著者だということが分かったのは、やっと1659年のことである。この「小さな手紙」は何の予告もなく、また、大きな人気があったにもかかわらず、「第18の手紙」で終わっている。パスカルは「第19の手紙」も書き始めていた。執筆を止めたことに関しては彼は何も述べていないが、その理由は容易に推測できる。1657年2月、エックス・アン・プロヴァンスの議会が「第17の手紙」を焼くことを命じてい

1) *Les Lettres Provinciales*（『プロヴァンシアルの手紙』のテキストとしては、Pascal (Blaise), *LETTRES A VN PROVINCIAL,* Edition princeps, 1656－1657.
——*Oeuvres complètes,* Paris, Hachetts, (Grands Ecrivains), éd. Brunschvicg, 1904－1914, 14 vol. in-8°, (略号 *GEF.* ローマ数字は巻数を表わす).
——*Les Provinciales,* Paris Garnier, éd. de L. Cognet, 1965, 503 p. in-8°.（略号 *LC.*）を主として用いた。また、邦訳では、『パスカル著作集』Ⅲ，Ⅳ，田辺保訳（略号 T.）及び、『パスカル全集』第二巻所収の中村雄二郎訳を参照した。本書の日本語題名は、状況を考慮して、『小さな手紙』、『田舎の友に宛てた手紙』、『プロヴァンシアルの手紙』を与えている。ちなみに、*Petites Lettres* は論争初期に用いられた呼び名で、やがて、*Les Lettres Provinciales* が定着してくる。
2) R. P. Rapin, *Mémoires.* t. Ⅱ, pp. 367-369.
3) *Annuæ Litteræ Prouinciæ Franciæ Ad annum Christi 1656,* Roma, ARCHIVUM ROMANUM SOCIETATIS IESU, 6 feuilles (12 p.). Cf.「関西学院大学社会学部紀要」第63号、1991年。

る[4]。1657年3月11日には教皇アレキザンドル7世が禁止の勅令をルイ14世に送っている[5]。「第19の手紙」執筆時に、外部からの圧迫が激しかったことがうかがえる。ジャンセニウス擁護が教皇や国王否定につながることになったのである。パスカルにはこれはできない。しかし、彼は戦いを止めたわけではなかった。彼は手段をかえてイエズス会非難を続けている。

このようなパンフレットは表現においてどのような特徴を持っていたであろうか。それは簡潔に、素早く、民衆に情報を提供することができたことである。1656年1月から1657年3月まで、次々と新しいパンフレットが発売されて興味ある情報が提供されたことは、上の記述からも理解できるであろう。「簡潔に」とは、どのようであったか。同じくジャンセニウスを擁護するアルノーの「ある大貴族に宛てた、第2の手紙」[6] と比較してみよう。

5命題[7]の誤りがジャンセニウスの中にあるかどうかに関連して、パスカルはアルノーの「第2の手紙」を利用している。デュシェーヌによれば、アルノーが279行用いているところをパスカルは112行にまとめ、論旨をさらに展開するために102行用いている。アルノーがある点を主張するのに反論を立ててひとつずつ反駁して結論に導いているのに対し、パスカルは要点をまとめて、問題点を明確に示し、そして、それを次の問題へと展開させている[8]。

パスカルが『プロヴァンシアルの手紙』において用いた表現形式は、手紙と対話である。この2つのジャンルでは論理的な構成にとらわれずに、さまざまな問題を自由に取り扱うことができる。『プロヴァンシアルの手紙』の成功の多くは、手紙と対話というこのジャンルを十分、駆使したことに負っているといえよう。この2つのジャンルによって、パスカルは扱う主題を民衆が理解できる程度にまで平易にしているが、しかし、真剣さと内容の質を減じてはいない。対話は古代ギリシャにまでその伝統をさかのぼることができるし、手紙は当時、神学、哲学、科学、政治などの高度な主題を扱いうるジャンルにまで成長していた。パスカルはこれらのジャンルを利用して、「第17の手紙」「第18の手紙」に見られるごとく神学問題を深く掘り下げて論じることができたのである。手紙に関しては、パスカル DETTONVILLE の筆名で、すでにこのジャンルを用いて幾何学論文を執筆している[9]。手紙と対話は17世紀では小さなジャンルであり、本来、多人数を対象とするには適していない。しかし、著者と読者の姿が浮かび上がり、手紙と対話が継続するにつれ、両者の距離は減じ、議論される内容は親しみのあるものになる。パスカルは『プロヴァンシアルの手紙』において、この2つのジャンルを用いて専門家のみならず、一般民衆にまで読者を広げることに成功し、サロンの教養ある貴婦人たちも熱心に読み、論争の展開を楽しんだのであった。

本論では、手紙のジャンルをとりあげる。

『プロヴァンシアルの手紙』の形態は、その題名の示すごとく、手紙形式である。前述のように、差出人は、「第3の手紙」の末尾にイニシャルが記されている以外は匿名である[10]。宛名は「第1の手紙」から「第10の手紙」は、「田舎の友への手紙」（フィクション）であり、「第11の手紙」から「第16の手紙」はイエズス会の神父がた宛て、「第17の手紙」と「第18の手紙」はイエズス会のアンナ神父[11]宛となっている。『プロヴァンシアルの手紙』

4）*GEF*. VI, pp. 377－378.
5）*GEF*. VII, p. 3.
6）*Seconde Lettre à un duc et pair,* 1655. 著者、アントワーヌ・アルノー Antoine Arnauld（1612-1694）はソルボンヌの博士で、ポール・ロワイヤル修道院の代表的神学者。
7）「社会学紀要」16号、1968年．参照。
8）*Méthode chez Pascl,* Roger Duchêne, "D'Arnauld à Blaise Pascal ou l'art de faire《plus court》: l'exemple de la dix-septième *Provinciale,*" p. 253－263.
9）たとえば、*Traité générale de la roulette ou problèmes touchant la roulette proposés publiquement et résolus par A. Dettonville.*
10）『プロヴァンシアルの手紙』の著者、ブレーズ・パスカルの筆名である。1657年3月、合本が出版されるが、その題名にあらわれる。*Les Provinciales ou les letters écrites par Louis de Montalte à un Provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites, sur le sujet de la morale et de la politique de ces Pères*. Cologne, 1657.
11）フランソワ・アンナ François Annat（1590-1670）フランスのイエズス会士。イエズス会のフランス管区長を勤める。Cf.「アンナ神父『プロヴァンシアル論争』におけるアンチ・ジャンセニスト」関西学院大学「論攻」15号、1968年.

の目指す受取人は、できるだけ多くの人々であり、神学者、神父など聖職者だけでなく、社交界に出入りする紳士淑女も対象とされている。

ニコル[12]の証言によれば、学者にも一般の人々にも読まれた。『プロヴァンシアルの手紙』は期待されるすべての効果を実現した[13]。パスカルは手紙という親しみある柔軟なメディアで興味ある情報を提供したのである。

シャルル・ペローによれば、「すべてがそこにある。言語の中の純粋さ、思考の高貴さ、推理の堅固さ、からかいの繊細さ、そして、至るところに他では見出せない楽しみがある」[14]。

一般に、ジャンセニストの文体には、優雅さが欠けていた。サント・ブーヴは次のように言う。「アルノーの論争文書には生気がない。あいまいさを恐れるあまり、無駄な繰り返しに陥っており、絶えず定義するように駆られている。力強い知性を動かす積極的な意志は感じられるが、内部から溢れてくるものがない。彼自身の表現は文法の一般的規則、論理の結果以外のなにものでもない。健全な、正しい、優れた意味での表現であるが、非人格的であり、また、内的な反映やニュアンスがない」[15]。

パスカルの『プロヴァンシアルの手紙』はいきいきとしており、問題を投げかけ、喜ばせ、怒らせ、憤慨させる。ヴォルテールは『プロヴァンシアルの手紙』を評して、「散文の中で、天才による第一の書」[16] であると述べている。

I．田舎の友への手紙—私的書簡—

1）導入部

1．情報の提供

『プロヴァンシアルの手紙』の冒頭から、パスカルは一挙に読者の関心を、著者がこれから提供しようとする情報に集中させる。

> 僕たちは、まんまとだまされていたんだよ。やっと昨日になって、僕も迷いから覚めたというわけだ。それまでは、ソルボンヌ[17]で論議されるほどの問題なら非常に重要で、信仰上も絶対にゆるがせにできぬものとばかり思っていたんだ。パリ大学神学部[17]のような名門大学であんなにたびたび会議が持たれ、そこでは、めったに例のない異常な出来事が何度も起こったというんだから、これはもう尋常普通ではない重大問題が議せられているに違いないと信じないでいられないじゃあないか。ところがだよ、これから話すように、これほどの大騒ぎの結果がどういうことになったかを知ったら、きっと君も驚くだろうよ。僕は、その完全な情報を手に入れたから、ひとつそれをごくかいつまんで、君にも知らせておきたいと思うのだ[18]。

権威があるソルボンヌでたびたび会議を開いて重大問題を審議していると思われていた。ところが、その真相は意外だった、そして、真相を知らせると言う。それは、どのような情報であろうかと、読者の注意を引きつけるこの名文で『プロヴァンシアルの手紙』は始まるが、ここでは、この情報の内容とは直接関係のない記述を用いて、パスカルが読者を、非常にリアルに情報に注目させている。

2．登場人物の紹介

パスカルは登場人物を紹介している。

> 事の真相を知ろうとして、僕はナヴァール学寮[19]の学者である、ある先生に会いに行ったんだ。この先生は、僕の家の近くに住んでいて、君も知ってのとおりジャンセニスト反

12）ピエール・ニコル（1625–1695）、ポール・ロワイヤル修道院の神学者。アルノーと共に、『プロヴァンシアルの手紙』を執筆するパスカルのために、資料を準備し、協力していた。
13）*Histoire de Provinciales, Les Provinciales*, 1700, 2 vols., pp. VI–VII.
14）*Parallèle des Anciens et des Modernes,* Paris, 1693, 2 vols., I, p. 206.
15）*Port-Royal,* Paris, 1878, 7 vol. II. p. 171.
16）*Le Siècle de Louis XIV,* Classiques Garnier, Paris, 1947, 2 vols., vol. II, Ch. XXXII, p.115.
17）1257年、ロベール・ド・ソルボン Robert de Sorbon によって創立されたパリ、フランスだけでなく、ヨーロッパ最初の学寮 collège。1554年、神学部付属の議決機関となり学に関する著作の正統性を審議し、判決を下す機関となった。ソルボンヌは通称であった。
18）*1re Lettre, LC.* pp. 3–4. cf. *T.* t. I, p. 9.
19）Collège de Navarre、パリ・カルチエ・ラタンにある学寮。Cf. 関西学院大学「社会学部紀要」第70号、1994年。

対派の急先鋒の一人だ[20]。

また、もう一人の人物を紹介している。

その後、事件の確信をつかめたと思うととてもいい気になって、ある人のところ出かけたのだ。その人は、ますますお達者で、ご自分の義理の弟さんのところへ連れていってやろうとおっしゃるくらいのお元気さだった。その弟さんというのが、そうざらにはいないぱりぱりのジャンセニストなんだが、なかなか気のいい人物でもあるんだ[21]。

これらの文章は、『プロヴァンシアルの手紙』の議論とは、直接、関係がないが、紹介されている人物はこれからの情報の提供者であり、あるいは、あるひとつの神学的立場を代表する重要な人物である。これらの人物を紹介されることによって、読者は『プロヴァンシアルの手紙』論争のリアルな状況のなかに連れてゆかれたのであろう。

その門のところで、親友の一人に会った。熱心なジャンセニストの男だ。僕の友達はどこの党派にもいるんだよ。もっとも彼は、僕が訪ねようとする神父とは別の人に会いにきたんだがね。だが、僕はぜひと頼んで、一緒についてきてもらうことにし、お目当ての新トミストの神父に面会を求めた。神父は、僕と久しぶりの対面をとても喜んでくれた[22]。

神父さんはいきなり、僕を抱き締めてたいへんな歓迎ぶりだった。ずっと僕を憎からず思ってくれていたんだ。取りとめのない話しを二、三かわした後、さりげなく本論に入っていこうとして、(……)[23]。

パスカルはしばしば "le bon Père", "mon Père" "mon homme" を用いる。

Et à ces mots, *le bon Père* arriva chargé de livres ; ...[24]

Non, *mon Père,* lui dis-je, je ne le puis souffrir.[25]

Mais, ne pouvant m'assurer de sa réponse, je ne le priai de me dire confidemment... *Mon homme* s'échauffa là-dessus, mais d'un zèle dévot...[26]

je lui dis au hasard : Je l'entend au sens des Molinistes, A quoi *mon homme,* sans s'émouvoir : Auxquels des Molinistes, me dit-il, me renvoyez-vous?[27]

3．前置きの巧みさ

これから始める本論に対する関心と興味を巧みに掻きたてている。

僕たちは、まんまとだまされていたんだよ。やっと昨日になって、ぼくは迷いから覚めたというわけだ。それまでは、ソルボンヌで論議されるほどの問題なら非常に重要で、信仰上も絶対にゆるがせにできぬものとばかり思っていたんだ。パリ大学神学部のような名門大学であんなにたびたび会議がもたれ、そこでは、めったに例のない異常な出来事が何度も起こったというんだから、これはもう尋常普通でない重大問題が議せられていると信じないではいられないじゃないか[28]。

イエズス会士ほど大した代物はちょっと他にないよ。ぼくはなるほど、何人ものドミニコ会士たち、博士たち、その他あらゆる種類の人達に会った。だが、こういう訪問をいくら続けても、僕は少しも教わるところがないのだ。他の連中は、結局、イエズス会士の猿真似をしているに過ぎない。何事でも、源泉に帰ることが一番大切だ[29]。

1）本文

1．くつろぎ

くつろいだ状況から、本文に入る。

20) *1re Lettre, LC.* p. 8. cf. *T.* t. I, p. 12.
21) *1re Lettre, LC.* p. 10. cf. *T.* t. I, p. 13.
22) *2e Lettre, LC.*p. 25. cf. *T.* t. I, pp. 32-33.
23) *5e Lettre, LC.* p. 79. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 97.
24) *4e Lettre, LC.* p. 56. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 69.
25) *5e Lettre, LC.* p. 81. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 98.
26) *1re Lettre, LC.* p. 11. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 14.
27) *1re Lettre, LC.* p. 12. cf. *T.* t. Ⅲ, pp. 15-16.
28) *1re Lettre, LC.* p. 3. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 9.
29) *3e Lettre, LC.* p. 53. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 67.

この前なんか、例の神父さんに会ったときの愛想のよさといったら、僕なら君に対してだってとてもあんな態度はとれないよ。僕の姿を見かけるとすぐそばに寄ってきて、手にした本を見ながら、こういうんだ[30]。

2．予備的情報の提供

冒頭に予備的重要情報の提供をしている。

今のところ、彼らの会の政略の話はあとになりそうだ。会の重要方針のひとつをお伝えしたい。すなわち、告解の安易化についてだ。これこそは、彼らの会の神父連中が、ただ一人もはねつけず、誰もかれもを捉えこもうとして発明した、なんともうまい話なんだから。先へ進む前に、これを知っておくことがぜひとも必要なんだ。だから、例の神父も、この点を僕に教えておくのが適当だと思ったのだろう。こんな具合だ[31]。

3．興味深い材料

興味を引く事件を材料に用いている。ジャン・ダルバの話を持ち出し、変化と面白味を与えて、前回の「第6の手紙」の議論を次に展開している。

なにしろ例の人のいい神父さんがまじめに話している最中に、僕がジャン・ダルバの話なんか持ち出して茶化したものだから、神父さんも少々、むきになっていたんだが、もう2度とそんなことはしないとぼくが確約したので、やっと機嫌を取り直し、また話しだした[32]。

4．連載物

連載物の形態をとって、読者の興味を次の手紙へとつないでいる。この手法は各手紙に見られる。「第6の手紙」では前の手紙の末尾で言及したことに触れ、この手紙で扱うことに簡潔に述べている。

この前の手紙の終りでも、ちょっと言っておいたことなんだが、例のイエズス会の神父さんから、僕は良心例学者[33]たちが、自分たちの意見と、教皇や公会議や聖書の決定との間に食い違いが生じた場合、どういうふうにして折り合いを付けるかを教えてもらう約束ができていたんだ。そんなわけで、二度目に訪ねたとき、彼はそれを教えてくれた。その時の様子をこれから君にお伝えしたい[34]。

3）結び

1．結語

結語を次の展開に結びつける。恩寵問題から道徳問題への戦術の転換が予告されており、「第5の手紙」から「第10の手紙」まで道徳問題に関する一連の手紙となる。

「それじゃ、君は、奴らが教え la doctrine よりも素行 la Morale においてもっとひどい乱脈ぶりなのを知らないのか」。友だちは、いくつかの奇怪な実例をあげてくれたんだが、残りはまたの機会に話すということだった。この次には、彼から聞いた話を話題にできたらと思う[35]。

2．次の手紙へ

長くなって、退屈なものとならないために、適当な箇所で切り上げて、次の手紙につないでいる。

会談はここで終わった。だから、この手紙もここで切り上げよう。それに1通の手紙としてはもういいかげん長くなったようだから。君ももう十分と思っているに違いないだろうから。あとは次の手紙にしよう[36]。

今日はこの辺で切り上げることにしよう。この時の会見でぼくが聞いたすべてをお知ら

30）*9e Lettre, LC.* p. 153. cf. *T.* t. Ⅲ, p. 193.
31）*10e Lettre, LC.* p. 171, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 219.
32）*7e Lettre, LC.* p. 114, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 143.
33）良心例学 casuistique は、決疑論とも呼ばれ、倫理神学の一部門を構成する。複数の道徳上の規定が同じ行為に対して相矛盾したことを命じている場合、また、具体的な個々の事例に規定を適用する場合に生じる諸問題、良心が遭遇する様々なケースにつ研究する。イエズス会は人を導くために特に熱心に良心例学に取り組んだ。スアレス、サンチェス、モリナ、エスコバル、ボオニーなど、イエズス会の良心例学者が『プロヴァンシアルの手紙』に引用されている。
34）*6e Lettre, LC.* p. 95, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 119.
35）*4e Lettre, LC.* p. 71, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 84.
36）*5e Lettre, LC.* p. 94, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 110.

せするには、一度かぎりの手紙ではとても足りないのだから[37]。

3．紙数不足を理由にして

紙数が足りないので全部を述べていないと注意を喚起し、イエズス会の道徳に関する弛緩がどんなに大きいかを想像するように導いている。

こんな次第で、ぼくは、この神父さんの言葉どおりを、君にお伝えしているわけだ。しかし、いつものことながら、言いたいことは山ほどあっても、紙が足りないのだ。全部言おうとすれば何冊もの本を書かねばならないほど、もっと他にも、いろいろと大事なこともないわけではないんだがね[38]。

4．次号予告

次号を予告している。

僕たちはそこで別れたというわけだ。だから、今度の話は、彼らの政略についての話しになるだろうよ[39]。

5．局面の終了

一つの局面が終ったことを告げている。

こんなふうな話を少ししたあとで、ぼくは神父と別れた。ここへはもう二度と来ることがないような気がした。でも、そいつは残念だと思わないでくれ。彼らの定めた規律について、さらに君にお伝えする必要性が生じたら、ぼくだって彼らの本はかなり読んだつもりだし、彼らの倫理観についてなら、あの神父と同じくらい、彼らの政策にかけてはたぶん、あの神父以上の話ができるだろうと思うよ[40]。

6．論争の目的

論争の目的、そして、それを最後までやりとげることを予告している。

あなたがたの正体が何者かをはっきりわからせることが、何にもまして重要なことだったのです。私がこの手紙で着手したのもそのことでした。最後までやりとげるには、もう少し時間が必要です。いずれ、目にものを見せてあげますよ、神父さま[41]。

「第18の手紙」で論争文書を終える予定は、この手紙の執筆時にはなかったが、パスカルは、イエズス会士に対して書いたこれまでの論争の手紙の動機、目的を示し、非難攻撃をしている。また一方、イエズス会士にこれほどまで不当な異端呼ばわりをされながら、何も言わずに黙っているポール・ロワイヤル修道院の人々に対しても不満を表している。

あなたがたの欺瞞がすべてあばかれれば、あなたがたの非難にはどんな根拠もなく、あなたがたの相手にはどんな誤りもなく、教会には異端なんて存在しないことが誰の目にも明らかになるでしょうから。

神父様、このような益を手に入れることが、私の目的なのです。宗教全体にとっても、それは非常に益になると思われるのですが、あなたがたからこんなにひどい仕打ちを受けながら何も言わず黙っていられる人達がいるのが、私には理解できません。自分たちはどんな侮辱を受けても動じないというのはとにかく、教会までもが侮辱されているのですから、何か一言あってもいいのではないかと思うのです。まして、聖職にある者なら、特に信仰問題について、みすみす中傷にさらされ自分の評判を失うようなことがあっていいものかと疑問を感じています。それでも、あなたがたに言いたい放題いわせて平気な人達がいるのです。ですから、偶然あなたがたが私にこんな機会でも与えて下さらなかったとしたら、各方面であなたがたがふりまいておられる汚いうわさ話にたてつく者はおそらくだれもいなかったでしょう[42]。

パスカルは手紙というジャンルの持っている特質を十分に駆使して、読者の関心を引き寄せ、読者を楽しませ、しかも、重要問題の情報を提供し、問題の核心に入っているのである。

37) *6e Lettre, LC.* p. 113, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 137.
38) *7e Lettre, LC.* p. 132, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 162.
39) *9e Lettre, LC.* p. 170, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 212.
40) *10e Lettre, LC.* p. 192, cf. *T.* t. Ⅲ, p. 239.
41) *15e Lettre, LC.* p. 296, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 128–129.
42) *18e Lettre, LC.* p. 380, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 237.

Ⅱ．イエズス会の神父がたへの手紙—公開質問状—

論理と感情

「第10の手紙」までの宛名人は「田舎の友」であったが、「第11の手紙」以後は、「第16の手紙」までが、「イエズス会の神父がた」「第17の手紙」と「第18の手紙」は「イエズス会のアンナ神父」であり、直接イエズス会士と論戦し、それを公にしている公開質問状である。

これら後半の８通の手紙は前半の10通の手紙と内容と方法ともに関連がある。内容は良心例学と恩寵問題であり、イエズス会の良心例学者の著作によって、その不道徳性やポール・ロワイヤル修道院断罪の不当性をあばく。前半の手紙に豊かにあったユーモアも幾分かはある。しかしながら、「第11の手紙」から「第18の手紙」は、重要な点で、前半の手紙と異なっている。推理はより力があり、痛烈であり、自己弁護と直接、論敵を攻撃するため、対話は放棄され、鋭い風刺が多く用いられている。最後の２通の「手紙」では、恩寵の問題と５か条の命題の断罪にも戻り、中立的な立場の人々の気持ちを害しさえするけれども、いきのよい、パスカルのポール・ロワイヤル修道院弁護はきわめて雄弁である。イエズス会の良心例学の不道徳性とジャンセニウスやポール・ロワイヤルの人々に対する異端呼ばわりの不当性を、アンナ神父への質問状の形をとりながら、広く世間の人々に訴える公開質問状である。

１）論理—幾何学的精神の発露—

幾何学的精神の厳しい正確さに基づく議論が行なわれる。明確な目的を持った順序があり、各手紙の冒頭には主題、ときには、議論の梗概が書かれている。

たった今、近刊のご著作を見せていただいたところです。ただただ、ぺてん呼ばわりを続けて、(……) そこで、この手紙では、あなたがたからの嘘つき呼ばわりに対して、私の引用は正しかったことをあかし立てたいと思います[43]。

続いてあなたがたの中傷をとりあげましょう。まず、あなたがたの『警告』の中で残っているものについて、お考えするとしましょう[44]。

あなたがたのご対応ぶりを見ていて、ああこれは私ども双方ともが一休みするのがいいと思っていらっしゃるんだなあと、ひとり合点してしまいました。それで、私もそのつもりになっていました。ところが、あなたがたときたら、その後ほんの僅かな間に、どんどん多くの文書を出してこられるのですから、これではもう平和もおぼつかないという気がしています。なにしろ平和はイエズス会士が黙っていてくれることにかかっているんですからね。この休戦の決裂があなたにとってそれほど有利になるかどうかは知りません。ですが、この私にして見れば、あなたがたが著書という著書の中で決まり文句のように、さかんに異端呼ばわりなさるのを打ち砕くのに、これがいい機会にならないでもないと、案外困ってはいないんですよ[45]。

パスカルはあらゆる攻撃に対して、詳細に吟味し、反撃の議論を組み立てている。それは明確な説明であり、反証であり、反駁である。

あなたがたがぺてんだといわれる第一点は、「施しに関するバスケス[46]の意見」です。(...) 第二点、すなわち、聖物売買の問題については、(...) しかし、私はこれ以上とやかく言っている暇はありません。破産した者についての、あなたがたの三番目の中傷に対して弁明することを考えなくてはなりませんからね[47]。

「第18の手紙」では非常に巧みな議論がなされ

43) *13e Lettre, LC.* pp. 236–237, cf. *T.* t. Ⅳ. p. 61.
44) *16e Lettre, LC.* p. 295, cf. *T.* t. Ⅳ. p. 137.
45) *17e Lettre, LC.* pp. 327–238, cf. *T.* t. Ⅳ. p. 175.
46) ガブリエル・ヴァスケス Gabriel Vasquez (1551–1604)、スペインのイエズス会士。
47) *12e Lettre, LC.* pp. 217–231, cf. *T.* t. Ⅳ. p. 37–50.

ている。イエズス会士はジャンセニウス[48]とその弟子たちがカルヴィニスト、つまり、異端であることを立証しようとする。この非難に対して、パスカルが反駁ををする。彼は、ジャンセニストがカルヴィニスムを嫌悪しており、さらに、恩寵に関するジャンセニスムの教説はカルヴィニスムと敵対していると主張する。実際には、ジャンセニスムの教説は新トミストの教説と一致しており，イエズス会士は不本意であるが，新トミストの教説を認めている。それはジャンセニスムのものと同様なのであるとパスカルは言う[49]。

ですから、もう彼等を異端だなんて言わないで下さいよ、神父さま、あなたがたの論争の性質に適合した、もっと他の呼び方がよろしいですよ。(……) あなたご自身の規定にしたがって判断すると，ジャンセニウスを立派なカトリックとみなさないわけにはいかないという気がするのです。この点を吟味するのに、あなたがおたてになった規定とは次のようなものでした[50]。

『プロヴァンシアルの手紙』の後半部は、パスカルの幾何学的精神の明晰さを、その議論の組み立てにおいて、その説明において、その例証において、きわめてよく示している。しかし、それは相手に対していつも公正、公平であったということを意味するものではない。『プロヴァンシアルの手紙』のパスカルは『パンセ』でのようには冷静ではない。彼は論争の真っ只中にいるのである。

2）感情の表現

『プロヴァンシアルの手紙』の後半部では、前半部よりも感情の強い表現が見られる。

毎日のように、『聖なる童貞性について』という本のことで私に攻撃をかけてこられるのも、どういうおつもりなのですか。この本は、オラトリオ会の一神父のになるものだそうですが、私はその本を見たことがないのはもちろん、その著者に会ったこともないのです[51]。

さらに深く追求する材料があることを示唆している。

しかし、私はこれ以上、とやかく言っている暇がありません。破産した者についての、あなたがたの三番目の中傷について弁明することを考えなくてはなりませんからね[52]。

神父さま、私が、あなたがたの会の著者たちの基準のなかから、あなたがたの一番お気にさわりそうなものをことさら選び出してきたのではないことは、よくおわかりでしょう。そうしようと思えばできたのです[53]。

こうなれば、もう何をいわんやです。あなたがたも、もうぐうの音もでないとお認めでしょう。けれども、こんなことくらいはあなたがたにしてみればごく当り前のことなのでしょう。いくらでも例はあるのですが、もうひとつだけ例を引いて何とかわかっていただこうと思います[54]。

相手の主張の根拠を吟味して、鋭く攻撃する。

あなたがたが自分の言い分をどんなふうに証拠立てられるかを拝見することにしましょう。そのあとで、私が自分の主張をどのように裏付けるかをみていただくことにしましょう[55]。

神父の引用のまずさをついて，子供扱いしている.

そうなると，神父さま、あなたがたがあれこれやと引用をつらねて、あわよくばともくろんでおられる成果はどうなるのでしょうか。煙のように消えてしまうのでしょうか。あなたがたを断罪しようと思えば、あなたが

48）コルネリウス・ジャンセニウス Cornelius Jansenius（1585–1638)、オランダの神学者、ジャンセニスムの創始者。主著『アウグスチヌス』*Augustinus*（1640)。ジャンセニウスの神学思想はジャン・デュヴェルジェ・オランス（サン・シラン）によってポール・ロワイヤル修道院に伝られ、大きな影響を及ぼし、ポール・ロワイヤル修道院はジャンセニストたちの本拠となった。

49）Cf. 拙論「思寵論からみたパスカルの宗教思想」「理想」1981年、7月号。

50）*18e Lettre, LC*. p. 364, cf. *T*. t. Ⅳ. p. 221.

51）*17e Lettre, LC*. p. 332, cf. *T*. t. Ⅳ, p. 179.

52）*12e Lettre, LC*. p. 231, cf. *T*. t. Ⅳ, p. 50.

53）*11e Lettre, LC*. p. 205, cf. *T*. t. Ⅳ, p. 18.

54）*15e Lettre, LC*. p. 228, cf. *T*. t. Ⅳ, p. 121.

55）*13e Lettre, LC*. p. 238, cf. *T*. t. Ⅳ, p. 63.

たが自分の正当化のために別々にしておかれたこれらの規律を、合わせて一つにするだけで足りるのですからね。いったい、私が、あなたがたの著者の中の引用した部分の弁明のために、引用しなかった部分を持ってこられるのは、どういうわけなのですか。その間になんの関係もないではありませんか[56]。

悪口を吐いて逃げていることを非難する。

もうだいぶ前から、ご著作の中で、私に対して数々の罵り文句を浴びせかけてこられましたが、この点について応戦する準備がやっと整いました。神父さまがたは、私のことを、「不信心者、茶化し好き、無知、軽率な奴、ぺてん師、悪口言い、狡い奴、異端者、変装したカルヴィニスト、新教徒デュ・ムーラン[57]の弟子、悪魔の群れにつかれた者」など、言いたい放題の名で呼んでくださいました[58]。

『プロヴァンシアルの手紙』の著者を探索して、失敗しているイエズス会士をあざ笑う。

このように申し上げたら、どうなさいますか。今度は、どこをついて攻撃してこられますか。私は口で言うことにも、書いたものにも、あなたから異端告発されそうな手掛りはまったく残していないはずですし、どんな脅しをかけてこられても、暗がりに潜んでいる私には、何もこわいものはないのですからね。あなたは、目に見えない一つの手が打ちかかってくると感じておられるでしょう。その手があなたがたの錯乱ぶりをすべての人に目にさらそうとするのです」[59]。

相手の証拠が問題とするに足りないことを示す。

ですから、同じやるならもっと別なやり方で、私が異端だという証拠をお見せ下さい。そうでないと、世間のひとはみな、あなたを無能だとみてしまいますよ[60]。

ですから、もし彼ら［ジャンセニスト］に罪があると納得させたいのなら、彼らがジャンセニウスのものだとする意味が異端的であることを示して下さい。そのとき、彼らは自然に、異端となるのです。しかし、あなたがたはとてもこんなことはおできになれないでしょう。あなたがたご自身が白状しておられますように、彼らが彼のものだとする意味が誤りでないのは確かな事実だからです[61]。

パスカルは議論において、イエズス会士の主張に効力がないことを嘲弄するにとどまらず、その誠実さのなさ、その性格を攻撃して、彼らの議論の信用を落とすことを求めている。彼らの欠陥を立証するために、彼自身の優越を示すのをためらっていない。

神父さま、あなたがたがこれで恐れ入っておられるどころか、愛が欠けていると言ってわたしを非難しようとなさるお気持ちにどうしてなられたのかは、存じません。このわたしは、あなたがたご自身がここまで嘆かわしい暴行を重ねて、次々に愛に背く恐ろしい行ないをしでかしておられることは少しも思い巡らさず、ただただ、まことと慎みをもって語っただけのことでしたのに[62]。

押えの利いた皮肉で嘲笑する。

これこそ、立派な折り紙付きの中傷です。すなわち、あなたがたに言わせれば、ほんの小罪に過ぎぬものです[63]。

こんな言い方をする者をお許しなさらないほうがよろしいですよ。神父さま。あなたがたの告解所に、たくさんなひとが集らなくなりますよ[64]。

パスカルのイエズス会士に対する攻撃は正確であり、そして、彼らの言い逃れを明白にあばいて

56) *13e Lettre, LC.* p. 252, cf. *T.* t. IV, p. 77.
57) ピエール・デュ・ムーラン Pierre du Moulin（1568-1658）。当時、カルヴィニストの代表的神学者。1599年から1620年、パリ西南郊外、シャラントンの改革派教会の牧師を勤め、イエズス会士と激しい論争をした。
58) *12e Lettre, LC.* p. 215, cf. *T.* t. IV, p. 35.
59) *17e Lettre, LC.* p. 330, cf. *T.* t. IV, p. 178.
60) *17e Lettre, LC.* p. 329, cf. *T.* t. IV, p. 177.
61) *17e Lettre, LC.* p. 340, cf. *T.* t. IV, p. 187.
62) *11e Lettre, LC.* p. 212, cf. *T.* t. IV, p. 24.
63) *16e Lettre, LC.* p. 312, cf. *T.* t. IV, p. 150.
64) *16e Lettre, LC.* p. 309, cf. *T.* t. IV, p. 147.

いる。しかし彼の言葉は穏やかで、抑制が利いている。

神父さま、この無茶苦茶な、不信仰きわまる言いぐさをどうお思いですか[65]。

これほどの汚らしいぺてんをろうするとは、ふてぶてしさもきわまったと言えないでしょうか[66]。

ですから，その人たちにも、神の前でとくと反省をこらしてもらいたいのです。あなたがたの良心例学者たちが、いたるところに広めた道徳が、教会にとってどんなに恥ずかしく、危険なものであるかを。彼らがここまで品行のふしだらさをゆるすにいたった事態が、どんな恥知らずで、途方もないことかを。また、そんな良心例学者を支持するあなたがたのふてぶてしさが、どんなに頑迷で、暴力的であるかを[67]。

さて、神父さま、この源泉から、あの数々の陰険なぺてんが生じてきたのです[68]。

あなたがたが、これに対する反論の文書の中で次のようにお答えになっているのを見ますと、笑いだしたくなる反面、恐ろしくなってきます[69]。

パスカルは『プロヴァンシアルの手紙』において、手紙と対話というジャンルを十二分に用いて、ジャンセニウスとポール・ロワイヤルの人々を弁護し、また、イエス会士を攻撃し、それを聖職者だけでなく、多くの人々に訴えることに成功したのであった。『プロヴァンシアルの手紙』がジャーナリスト文学の傑作と評せられるのは、まさに正鵠な評価であろう。

65) *15e Lettre, LC.* p. 289, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 122.
66) *11e Lettre, LC.* p. 211, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 23.
67) *11e Lettre, LC.* p. 202, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 16.
68) *15e Lettre, LC.* p. 289, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 113.
69) *16e Lettre, LC.* pp. 303–304, cf. *T.* t. Ⅳ, p. 142.